

小説

蝸 螂 (カマキリ)

稲瀬 隆

夏の酷暑が尻切れに萎み、寒ささえ感じられる八月末の夕暮れだった。小雨が降っている。少し早めの帰宅ができる、と、家でのあれこれの思いつつ、車を走らせている時に、それに気づいた。車体左前のコーナーポールの先に、薄緑の小枝のようなものがついている。初めはトップの部分がつ二つ折れになって垂れ下がっているように見えた。だが、それにしては金属光沢がない。ちぎれた草の切れ端でもへばりついているのだろうか。昼間、社屋の近くで芝刈りの音がしていたから、それも有りうる。とはいえ、もう走り出して数分は経っている。制限を少々超えた速度で街中を走るうちに、尚もしつかりへばり付いている異様さが

気になって目を凝らすと、下端に小さな三角形が見えた。カマキリだった。あまり得意な輩ではない。ゴキブリには程遠いが、少なからぬ忌避意識がある。なぜか連想する、ある人物像も影響しているかも知れない。かつての上司。苦手な男だった。

酔狂なやつだ。そう思いつつ、セルフのガソリンスタンドに寄った。大震災以降の習慣で、週末にはガソリンを満タンにすることになっている。

勤め先はロジスティック拠点として有利な、高速インターに近い郊外にある。緑が多く、倉庫兼営業所の構内には虫が多い。トカゲやヘビに遭遇したことも二度や三度ではない。しかし、こんな奇妙なところにへばりついたカマキリに出くわすのは初めてだった。

車外はやや強い風が吹いていた。給油を終えてポールの先を見ると、居ない。飛んで行ったのか、と思いきや、ヤツはそおつとポールからポディーに移ろうとしていた。抱えるようにしがみつけるポールと違って、車のポディーは掴まりにくい。この先までのお伴だな、と思うと、少々ほっとして口元が緩んだ。

けられる雨粒の潰れ具合で、車速が分かる。水滴は時速百キロ超の風を受けて崩れながら上方に流れ上つてゆく。もうさすがにヤツも飛ばされただろう。夕闇迫る薄暗がりの中で中央分離帯の緑に、なにげなく目をやると、網膜の隅に違和感が走った。

車は高速の入り口に向かう。曲線を描く道の両側には木木が茂り、路肩には草地もある。「降りるなら今のうちだぞ」

フロントガラスをシールする黒いゴムの、ワイパーも届かない位置に、その直線と一体化して、長楕円の緑の虫体があった。三角の頭部を押し付けて、その片目を車内に向けている。

FMのスイッチを入れて、アクセルを踏み込む。ジョン・ケージからはじまる現代作曲家特集だったようだ。流れている曲はフェルドマンの「コプトの光」。不協和音を連ねる管弦楽のゆらぎの海に、ピアノの音が一滴一滴落ちてゆく。身体が古代宗教の放つ光に包まれ、虚空に漂う頼りなさに浸る。

鼓動がひとつ不整な脈を打ち、右足に力が入った。アクセルが沈む。

ETCのゲートを突き抜けて、車は本線へのサイクロイド・アプローチを右に、左に、大きくうねりながら加速した。走行車線の流れに入つてすぐ、追い越し車線に出る。車速はきつちり110km。間欠ワイパーの合間に叩き付

車はまたリスクを冒しつつ、左右に大きく蛇行した。三角頭の二隅に丸く突き出た複眼が、道路照明の水銀光をくぐるたび、ひくんひくんと鈍く瞬く。いやな光景がフラッシュバックした。銀縁メガネの反射光と、低く押し殺した声・

車速はきつちり110km。間欠ワイパーの合間に叩き付

した声・

「お前まで、ムシ・か・・・」
頭蓋に突如湧き出て竄った声の主は、かの「上司」だった。それを聞く少し前までの。学部は違つが同じく大学の数年先輩に当たる男。それが「追い出し部屋」に一人、居た。

「追い出し部屋」

会社の意に沿わない人間を、解雇することなく、依願退職に追い込むための見せしめ小屋、座敷牢。いや「部屋」ならまだいい。大企業ならばそれは地下の資料室や備蓄倉庫あたりになるだろう。だが、中の下クラスの商社で従業員三十人足らずの一支店に、そんな余地はない。みな毎日常務するフロアの一隅を、パーティションで区切つただけの二平米ほどの区画だった。そのうえ、見せしめ効果を上げるために、仕切りの高さは150cmほどしかない。

当然、すべての音声は筒抜けになる。周囲を歩けば内を覗き見られる。だから彼の仕事ぶりは全社員の監視下にある。その彼に課せられた職務は「なにもしないこと」

彼の机には何も無い。パソコン、電話はおろか、書類やメモ用紙、筆記具さえない。すべての作業が許されていない。当然、眠ることは禁じられ、朝の九時から夕の五時四十五分まで、ひたすら机の前に座り、沈思黙考。姿勢を正

し、椅子に座つて机に向かう「業務」に専念せねばならないのだ。

彼が追い出し部屋に押し込まれた理由は、噂の範囲でしか分からない。転勤を拒否したから、とも、過重な時間外労働を批判したから、とも言われた。果ては、不正経理に関わつた、会社の粉飾決算を指摘した等々、憶測が憶測を呼び、妄想の域に達した。確かなのは、彼が管理職のユニオンに入ったのが引き金らしい、ということ。最下の役職とはいえ管理職だった彼には、残業手当はなかった。過重な時間外労働をうつつたえ、それが上層の逆鱗に触れたということだ。とはいえそれがすべてか、本当のところ分からない。会社が社員全員に彼とその家族との一切のコンタクトを「職務命令」として禁じているからだ。禁止の理由が振るつている。彼の業務「社秘に関わる沈思黙考」を妨げるからだそうだ。

物言わぬ蟻のように働け。それが社命か。

しかし、始めのうち眼光に宿っていた怒りも、次第に力を失い、三週目に入つたころには時折、抑うつと狂気が交互に現れるようになっていった。

車中をコプトの光子で満たしていたピアノは音列を失い、二音階を往復するだけの弦合奏の背後で、変則の時を、う

つろな時代の変遷を刻むだけの存在となつている。

フロントグラスにぶつかる雨滴は数を増した。ワイパーもスローモードでは視界を拭いきれず、せわしない高速モードになった。カマキリの体は、ちょうど拭いきれない飛沫の台形エリアに隠れた。瞬くような複眼は見えなくなつたが、エコーが近づいて照明灯がナトリウムランプに変わると、オレンジ色の光はすべての滴を煌めかせた。

「よおつ、飲みに行くか？ いい店あるんだ、いい娘いるぞ」

「最近、太つたか。食いもん考えろよ。」

「安くてうまいワイン、知らんか。甘味、酸味抑え目のフルボデー・・・」

彼は何かにつけて声をかけてきた。

「統計学は、理屈だけでも分かつてないとなあ」

「ネットワークとロジの勉強しとけ。オレも助かる」

時にはそれらしい「アドバイス」もあった。とはいえ、とくに世話になつた覚えはなく、むしろ迷惑の方が大きかつた。

「新歓やるから、幹事やつてくれよな」

「盛り上がるメンバーにしろよ」

アルバイトの女子を誘え、としつこく言われ、「飲みに

ケーション」なる厄介行事にしばしば付き合わされた。本来は、新人の初期不適合や若年層の不満を緩和するためのものだった。彼は上司から「軍資金」も貰つていたはずだ。

それが実態は、彼自身の欲求不満解消の場にもなつていた。彼の誘いを拒否した者は、何かにつけて冷遇された。定例・定型の連絡事項に変わりはしないものの、情報交換を兼ねた「私的」メーリングリストからは外された。支店全体の懇親会行事でも勝手に欠席がチェックされ、「出席いただけず残念でした」の葉書と、会費相当分の菓子が机に置かれることになる。こうした仕打ちには「ハブンチョ」と呼ばれ、恐れられた。だが、彼に従つた者にも試練があつた。

「一発芸、リクエスト！」

「はい、君のビールはブーツ・ジョッキ。つま先を立てて呑んで！」

「一気飲みなんてするなよ、学生じゃあるまいし。君はこのストローで呑め！」

かくしてビールを浴びる者、割酔いする者が出る。彼自身は軽いノリのジョークくらいに思つていたかも知れないが、イジられたり無茶振りされた方はたまらない。少なからぬ者が根に持っていることは容易に想像できた。

風雨は次第に強くなつた。緑色の生ける物体は、飛び散

る雨滴にも負けず、視界の一隅に貼り付いたまま動かない。FMから流れる曲は、プリンス・ボゼの「地理学者」に変わっていた。調整を破壊して協和音を成さない弦とピアノの旋律で時空を満たす。車内は小惑星や素粒子が飛び荒ぶ宇宙空間に変わる。ヴァイオリンが緊張の糸を擦り合わせ、時に光子を弾き出す。トランペットがこの世の危機を忘れるな、と警告を叫ぶ。フェルメールの画題で言つたらば、もはや、「地理学者」というより「天文学者」の方が似つかわしい。眼前に高速で迫り、両側に飛び去るハイウェイは、スクリーンに映し出されるゲームのようにも見えた。運転席は世界から孤絶した。そこに、過去からの音声が入り込んで来た。

「うつうつうつうつ・う・う・う」

電話の応対や業務上のやり取りが響くオフィスでも一瞬、それらが静まる時、低く、小さく、泣き声ではない、気合いとも呻きともつかない声が聞こえることがあった。

彼を「部屋」に押し込む準備は周到に、かつ陰湿に積み上げられていた。

ある日、職場のアンケートが行われた。記名欄の無い用紙に選択式の質問が三十問ほど並び、最終欄に「忌憚ない意見」を書け、とあった。彼は「時間外労働の長さ」を訴

え、「自由に考える時間がない」につけ、「業務は楽な方がよい」「十分なゆとりが望ましい」にも、を付した。後日、各自が逐次呼び出され、用紙記入の確認が求められる。用紙には蛍光インクの通し番号が振ってあった。件の彼はそこで、「君の望み通りにする」として待遇改善要望書なる書面にサインをさせられた。そして、何もしくなくて良い、してはいけないポストについた。

彼には一日四回、各五分以内のトイレタイムと、六十分の昼食時間は与えられた。ただしその時間帯は「任務の特殊性」を考慮して、他の者とはずらされていた。昼食時の自由は保障されていたが、社の周辺にはドライバー向けのコンビニしかない。弁当を買って「どこか」で食べるほかなかった。

社員は彼との会話は一切禁じられていた。社内での「あらゆること」が双方にとつての秘密事項として、口に出すことが禁じられた。当初は彼に話しかけられた者もいたが、大方、目礼は返したものの、言葉を返した者はいなかった。社命に従順なのである。

そんな中でも優しい若者は少なくなかった。同情のまなざしを送る者、わざわざパーティションのすぐわきで社内事情を立ち話する者たちもいた。私的に励ましメールを送ったり、訴訟に役立てるよう部屋の惨状を写メした者も

居たらしい。

彼に同情する者、彼を恨む者、そのどちらもが、彼の配下として動いた者に対して容赦ない視線を送るのは当然の成り行きだったろう。それを否定しようとする意識は、彼に対する殊更に冷たい態度として現れた。その一角には一切近寄らず、遠回りをし、目礼も返さなかった。彼の机の後始末は一年生社員たちにやらせた。明らかな私物のみ段ボール箱に詰めさせ、多少でも会社と関連するものは、価値ありと判断されたものを除いたすべて、名刺やノート、メモ、ファイル、使いかけの文具等一切を破棄・焼却させた。彼の机があった場所はレイアウトを変え、そこに机があったという記憶さえ抹消した。

慎重に彼のトイレタイムをかわしたつもりでも二度、三度、廊下で鉢合わせることがあった。そんな時、彼は刺すように「後輩」を見据えた。

自分も少しは楽しんだらう？ そう問われれば、全否定はできない。だが、そうそう彼の言いなりになつたわけでもない。後輩たちとは別途、本音のコミュニケーションを図つたつもりだった。付かず、離れず、互いに大きな衝突は避けながら、それなり仕事をこなしてゆく。社会人同士はその程度の距離感が妥当だと、少しの後ろめたさが、同情を抑え込んだ。後悔と怖れの予感もあったのに。

車内を満たすピアノが時間の連続と想念の不連続を結び、疾走する。ティンパニーは音がないはずの宇宙で雷鳴を轟かせ、スラップスティックが、ひるむ心にむちを打つ。打楽器の響きが、今という瞬間の危うさを研ぎ澄まし、切り分ける。不安定にゆらぐ焦燥感に、身体が浸ってゆく。

濡れたフロントガラスの右端を、にじるように這い上るカマキリが見えた。高速の風圧が、濡れたガラスの滑面で彼を押し上げているのだ。

シャツ、とワイパーが払って作る雨水の溜まりに沿って、彼の体が伸び、裏返しになり、両の眼が車内を睨んだ。

反射的に右手が払いのけるように動いた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

車が大きく中央分離帯に寄り、それを警告する側線の凹凸をタイヤが拾った。あわててハンドルを逆に切ると、すうつ、とタイヤが浮く感触が足下から伝わって、車は二車線を乗り越えた。眼の前に左の側壁が迫る。ハンドルを左右に振りつつブレーキを踏む。空白化した意識が、眼前の移りゆく映像を機械的に網膜から取り込む。

ガガッ！

車は止まった。幸い、激突を免れ、左側を軽く擦っただ

けだったが、全身は硬直していた。

彼の異常な状況、異常な様子は陰の支援者からネット上に流れ、彼自身の訴えもユニオンや労基署に届いた。まずは精神科医の診断を受け、疾病性を明らかにして、業務起因性が推定できれば労災になりうる、と。だが、すべてが遅すぎた。

その眼に狂気が宿った、と思えたその週末、彼は自殺した。夜中に正門正面、高速のアプローチからよく見える電信柱のトランス架台にロープをかけて、首を吊った。守衛は気づかず、夜が明け、車の往来が増えた時刻によくやく何人ものドライバーが目撃し、通報された。遺体を引き下ろした救急隊員は、その高さに唖った。彼はどっぴりこのコンクリート電柱を登って行ったのだらう、と。必死に上りゆく狂気の映像がまざまざと脳裏に浮かび、皆は凍り付いた。社名入りの建屋を背景にした遺体写真はネット上に流出し、かの「部屋」の写真は「ムシカゴ」としてマスコミの糾弾を受けることとなった。遺体が「まるで蠶螂」と書き込まれていたからだ。彼は復讐を成就した。

車はエンジンをかけたまま、もう長いこと止まっている。雨音とワイパー音に混じって、FMからの音列が恐怖の

後の時間を埋めていた。すべての音階楽器は、不協和音であることさえ拒否して、てんでにフォルティッシモを鳴らし、時間と空間と、生きていることの感性とのすべてが、ジグゾーのピースに分解されていた。

ひとつ深呼吸をして、ひとつずつピースを集め、現状認識をつなく作業に就く。

このまま高速走行は可能だろうか。少しの破損が命取りにもなりかねない。車外に出て状況を確認したいが大雨の夜、むやみに高速道路で車外に出るのはかなり危険だ。後方確認が出来る位置までそっと動いたが、大雨の中のライトからはなかなか速度が読み取れない。右ドアを開けて出る前に、発煙筒を点けて後方に投げたいが、車内での点火は危険だし、大雨の中では点火も危うい。

ハザードを点し、左座席に身を乗り出し、窓を開けて損傷を見たい。この事態を引き起こしたヤツ、彼の化身はどこにも見あたらない。パワーウィンドウがゆっくり下がり始めた。

つうーと、濡れた窓ガラスの上を滑り落ちてくるものがある。

ヤツだ。ヤツがゆっくりと三角の頭をこちらに巡らした。窓枠の陰に隠れていたのか。入れたら運転などできない。

ウィンドウが下がりきれば、車内に入ってくる！動揺す

る右手がスイッチを探り、切り替える。

あと一センチメートル。ヤツの足がガラスの縁にかかる。パワーウィンドウは、下がりきる寸前で止まり、上昇を始めた。

三角の頭が内側に入る直前に、窓は閉まりきった。ウィンドーのガラスが、ヤツの羽の一部と足を挟み込んだ。

殺生せずに、首尾よく抑え込めた。勝った。

高速を降りて街中に入る頃には、車内に流れる曲がニールセンのフルート協奏曲に変わっていた。古城が眠る森の奥を、陽気な精霊が飛び回るような清冽な音色。不安を呼ぶような和音を抑え、そよ風とせせらぎがもつれ合うような音律が、心地よく流れてゆく。

風雨はかなり治まっていた。建ち並ぶ店々の明かり、横断歩道を足早にわたる人々。日常の生活を生きる感覚が戻ってきた。ここはもう自分のテリトリーだ。妄想も亡霊も入り込む余地など与えない。もうカマキリなどどうでも良い、ただの虫にすぎないように思えた。

勤め帰りによく寄る酒店の前で車を止めた。ほんのちよっとだけ躊躇してから、少し窓を開けた。ぼとり、と緑の虫体が落ちてゆくのが見えた。

「とつとつ」ここまで付いてきちまったか。」

苦笑いしながら運転席のドアを躊躇なく開け、表に出た。エールビールを数本買って車に戻り、ふとわきの植え込みを見おろした時、再び「彼」を発見した。弱りきった動きでゆっくりと、秋に向かう店先のツツジの枝を伝っている。「そうか、ワインでも買いに来たかったのか?」

我知れず口元が緩み、左手でCORDONサインを送ってから、洗い立てのように光る愛車に戻り、TrigrahのCDを入れた。In the as well be spring が流れ、車内の空気がそれに答えた。

そう、ちよっぴり春の気分だね。